



第2号の自立活動だよりでは、第3回自立活動研修会と夏季研修会の簡単な報告と「冰山モデル」についてお伝えさせていただきます。

## 夏季研修会「発達障害のある子どもの理解と支援」

夏季研修会では、昨年度に引き続き岩本佳世先生（愛知教育大学・准教授）を講師に迎え、応用行動分析学の視点から発達障害のある子どもの行動に関する御講義をしていただきました。

今回は発展編ということで、学級などで集団する行動の結果（遂行成績）によってシールや好きな活動などの御褒美がもらえるといった「集団随伴性」について教えていただきました。「集団随伴性」を使うと、子ども同士の協力や援助等が起こりやすいという利点があるようです。

また、ワークショップ形式の事例検討では、本校の教員と地域の教員が活発に意見を出し合いながら支援方法を検討することができました。



## 第3回自立活動選択研修会「強度行動障害について」

第3回の研修会では、林大輔先生（たくと大府・施設長）を講師に迎え、強度行動障害に関する御講義をしていただきました。

講義では、「担任が孤軍奮闘しないよう学年の協力体制を整える」ことや「支援方法を統一することなどチームプレイの重要性や、人には誰しも相性があるため「重要な局面では子どもにとって相性のよいキーパーソンに頼る」ことの必要性など教えていただきました。

また、行動問題が起こった際に行動の回数を記録するだけでなく、持続時間や強度なども記録しておくことで対策を立てやすくなることも教えていただきました。さらに、本校の事例についても具体的な御助言をいただき、日々の支援のヒントになりました。

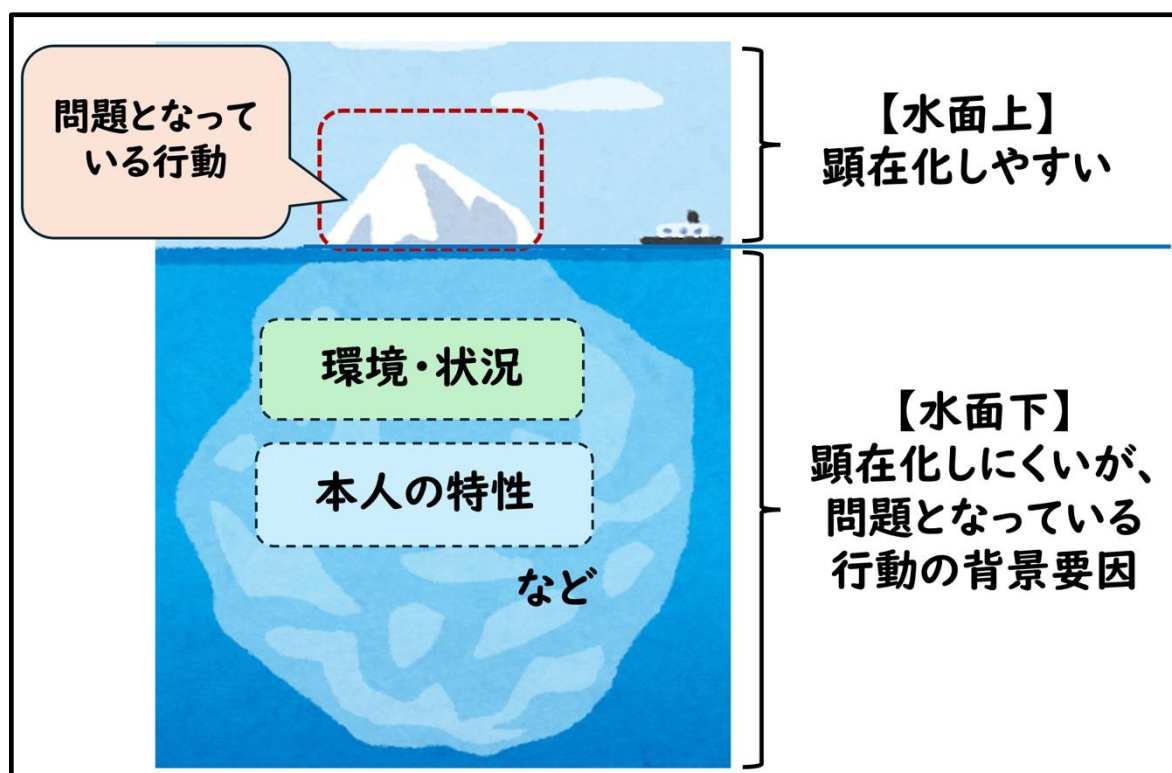


林先生の研修会では、本校の事例を検討する際に、「冰山モデルシート」を用いていました。「冰山モデルシート」とは、林先生の著書「冰山モデル・ABC分析シートの書き方・活かし方」で紹介されている問題解決シートです。それでは、そもそも「冰山モデル」とは、どのようなものでしょうか。次のページで「冰山モデル」について簡単に説明させていただきます。

# 冰山モデルって、なんだろう？

冰山モデルとは、目に見える部分と見えない部分の関係を示すために使われるモデルです。ある問題があったとき、表面的に見える部分（氷山の上の部分）はごく一部で、実際にはその下に多くの要因や背景（氷山の下の部分）が隠れていることが多いです。

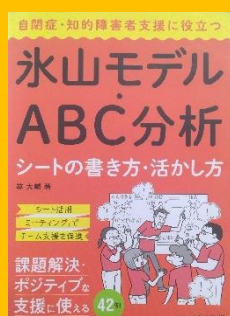
問題となっている行動においても、その原因は目に見えにくいものですが、「本人の特性」や「環境・状況」を洗い出していくことで、水面下に隠れている原因にせまることができる、という考え方です。



私たちはついつい問題となっている行動（水面上）のみに目を奪われがちですが、その背景（水面下）にある、「本人の特性」「環境・状況」などの要因にも目を向ける必要があります。

例えば、特定の「環境・状況」で課題となる行動が起きやすいのであれば、そこを変えれば発生を予防できることも多くあります。また、「本人の特性」に配慮した支援について考えることも効果的かもしれません。その際「本人の特性」を変えようとするのではなく、特性を前提としてどのような支援ができるかを考えていくことが大切です。【参考文献：林大輔（2022）自閉症・知的障害支援者に役立つ冰山モデル・ABC分析シートの書き方・活かし方】

このような冰山モデルをもとにした「冰山モデルシート」の活用方法や行動支援計画の立て方を詳しく知りたい人は、是非とも林先生の著書「冰山モデル・ABC分析シートの書き方・活かし方」を手にとってみてください。



「自閉症・知的障害支援者に役立つ冰山モデル・ABC分析シートの書き方・活かし方」林大輔（2022）中央法規